

キリスト者の預言者的使命

山川 暁 (単立鶴川キリスト教会伝道師)

「戦争は国会から始まる！」これは西川重則長老が絶えず口にされていたことばである。2015年9月19日の深夜の国会で集団的自衛権を認める安全保障関連法が強行採決された。それを国会の現場で見届けていたのが西川長老であった。「戦争は国会から始まる！」ということばは、西川長老が預言者的使命を自覚されて、口にされたもともといえるのである。

消費税が10パーセントに増額された。だが、消費税の使用目的はあいまいにされたままにされている。その一方で、防衛費は確実に増額されようとしている。これはアベ政権が戦争の準備に邁進していることを意味している。平和を希求する沖縄住民の意思を無視して、辺野古の海を強引に埋め立て、軍事基地の建設を急いでいるのもアベ政権である。これは沖縄をして、さらなる軍事基地化を強化することに他ならない。

こうした現実の中にあって、平和を作る使命を課せられているのがキリスト者である。だが、預言者エレミヤが語ったように、キリスト者は、平安がないのにも関わらず、「平安だ、平安だ」といってはいないだろうか。もし、そうだとすれば、キリスト者はイエス・キリストに背を向けていることになる。

今月は宗教改革を覚える時でもある。ルターが残したことばがある。「多くの人々が、キリスト教信仰を単純で安易なものと考え、数多くある美德の一つにすぎないとさえ見なした。それは、彼らが本当の意味で信仰を体験せず、信仰の偉大な力強さを実感したことがないからである。」そしてヴィッテンベルク城の教会の扉に打ち付けた95箇条の提題の最後の95番目の命題には、こうある。「そしてキリスト者は、平安の保証によるよりも、むしろ多くの苦しみによって、天国に入ることを信じなければならない(使徒14:22)」

洗礼を受ければ、それで天国に行ける。それが平安の保証であると考えているのではないのか。イエス・キリストが受けた苦しみ、苦難は御免蒙りたい。そうしたキリスト者

が多いのではないのか。それは信仰を単純で安易なものとしみながしている証拠である。

ルターが残したことばは、21世紀に生きるキリスト者に、本当の意味でのキリスト教信仰を体現しているのか、と問いかけているようにも聞こえる。イエス・キリストを信じる多くのキリスト者が、信仰を単なる美德としてしか受け止めていない、そういつたら言い過ぎであろうか。

天皇が存在するこの日本は唯一の神である創造主を信じるキリスト者からすれば文字通り異教の国である。漠然とした不安を感じて自殺した小説家がいた。芥川龍之介である。芥川の作品に「神々の微笑」という短編がある。この作品は遠くヨーロッパからやって来た宣教師が、派遣されて来た極東の島国は、創造主を拒む悪霊ともいえる神々に支配されていることを描いている。その神々とは天皇家が祖先の神をと崇めている天照大神である。聖書に親しみを持っていた芥川龍之介が書いたこの作品からキリスト者は日本の国が異教の国であることに目覚める必要があるのではないだろうか。

11月には大嘗祭が行われようとしている。政府は大嘗祭についてこう説明をしている。

大嘗祭は、稲作農業を中心とした我が国の社会に古くから伝承されてきた収穫儀礼に根ざしたものであり、天皇が即位の後、初めて、大嘗宮において、新穀を皇祖及び天神地祇にお供えになって、みずからお召し上がりになり、皇祖及び天神地祇に対し、安寧と五穀豊饒などを感謝されるとともに、国家・国民のために安寧と五穀豊饒などを祈念される儀式である。それは、皇位の継承があったときは、必ず挙行すべきものとされ、皇室の長い伝統を受け継いだ、皇位継承に伴う一世一度の重要な儀式である、と。

これは天皇家の私的な儀式である。だが、政府はこれに国費をつぎ込むのである。こうしたことが実施されようとしているにもかかわらず、キリストの教会からは疑問の声が上がらない。ましてや、天皇を否とする声は聞こえてこ

ない。西川長老が昭和天皇の戦争責任を厳しく追及すべきであると、述べ続けていたことは記憶に新しい。だが、あろうことか、昭和天皇を平和主義者とするイメージ作りがマスコミを上げて進められている。それと歩調を合わせるようにして、生前退位したアキヒト元天皇を通して、天皇のより象徴化を図る動きがある。そうした中で、東京新聞の読者の声を紹介する「ミラー」欄に59歳の女性の意見が掲載された。それを引用する。

6日特報面「本音のコラム」で宮子あずさ氏が「天皇制の本質は差別」と書いておられた。天皇の代替わりを無批判に報道するマスコミにふさぎ込んでいた私だが、氏の発言で曇天の空に日が差し込んだ気分となった。「生まれながらに尊い人がいる」という日本政治の枠組みに違和感を持ったのは小学校で基本的人権を学んだ時。民主主義と天皇制の併存はダブルスタンダードだと感じた。

国家の正統性は国民にあり、国民意識の共有に象徴天皇という権威を借りる必要はないと思う。むしろ「日本には一木一草に天皇制がある」と中国文学者の竹内好が言ったように、天皇という権威は国民の無意識に働きかけ、人権意識を弱めてきたともいえる。

職業選択の自由、国籍離脱の自由など基本的人権のない存在を、国民統合の象徴として社会の安定のために認めてしまっているのはその表れであり、これこそ権力による権威の利用ではないだろうか。国民が権力を批判しきれないのも、国民以外に権威が存在し、それを傷つけられないという付度が働くからではないか。改憲論議で第一条の見直しを求める意見が聞こえてこないのは残念だ。

一瞬でもよいので天皇制のない日本を想像してみてもいい。私は自国に対する責任意識が毅然として湧いてくる。非戦の信念も、被災者に寄り添うのも、外国人労働者と共に生きるのも国民である自分の責務だ。私はこれまで天皇制について本心を語ることを恐れてきたが、宮子氏の発言で勇気を得て、今度は付度せずに意見を言っていこうと思った。

西川長老は右翼からの脅迫電話を受け続けていた。預言者の使命を果たそうとすると、世俗社会からは石が投げられる。迫害を恐れているのは、預言者の使命を果たすことはできないのである。ルターが語っているように、キリスト者は多くの苦しみによって、天国に入ることを信じなければならぬのである。

2019年9月30日例会奨励「たとえそうでなくても」

ダニエル書 3:8-18 柴田智悦（日本同盟基督教団・横浜上野町教会牧師）

このネブカドネツアル王の命令は、戦時下の礼拝と似ているでしょうか。「あなた方が『海ゆかば』の朗誦を聞いた時は宮城を遙拝し、『君が代』を斉唱せよ。『国民儀礼』を行わずして礼拝することはならない。『国民儀礼』を行わない者はだれでも、即刻、検挙して刑務所に入れられる。」当時、日本で、この命令に抵抗した教会があったのでしょうか。おそらくほとんど全ての教会が礼拝において「国民儀礼」「君が代斉唱」を行っていたのでしょうか。

しかし、シャデラク、メシャク、アベ・デネゴは、神である主に対して絶対的な信頼を持っていました。そして、神には自分たちを救い出す力はあるので必ず救い出すことができるのですが、もし、神が救い出すことをよしとされないうで、救い出されなかったとしても、自分たちは王の神々には仕えず、彼が建てた金の像をおがむこともしない、と断言したのです。同じように、異教社会の中で生きてきた、戦時下の日本では、残念ながらこのような徹底した態度をとった教会は

なかったようです。

ところが、当時日本の占領下にあった韓国では、この日本の政策に抵抗した人々がわずかながらいました。その抵抗運動のリーダー的存在であった朱基徹牧師は神の言葉の説教権に対して国家権力は介入も干渉もできず、もし、世俗の国家権力が教会の霊的な問題に介入してくるならば、教会は抵抗権を発動すべきであることをよく理解していました。日本の教会が国家に、神社参拝は宗教行為か儀礼かと尋ねたことは、教会の自治権の放棄であり、神社参拝を国家儀礼と受け入れてしてしまったことは、教会の自律性の喪失です。

み言葉に従い、み言葉に基づいて判断し、神に立てられた預言者としての権威を持ち、今も生きておられるキリストの前でみ言葉を語るリアリティをもって、「もしそうでなくても、私たちは、あなたの神々に仕えず、あなたが建てた金の像を拝むこともしません」と告白していきたいと思えます。